



TITLE:

風景の持続性に関する基礎的考察 - 景観の計画・運営における方法と 課題-

AUTHOR(S):

山口, 敬太

CITATION:

山口, 敬太. 風景の持続性に関する基礎的考察-景観の計画・運営における方法と課題-. 土木学会論文集D3(土木計画学) 2012, 68(5): I_21-I_33

ISSUE DATE:

2012-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/174230>

RIGHT:

© 2012 公益社団法人 土木学会

風景の持続性に関する基礎的考察 — 景観の計画・運営における方法と課題 —

山口 敬太¹

¹正会員 京都大学大学院助教 工学研究科 (〒658-0065 京都市西京区京都大学桂C1)

E-mail: yamaguchi.keita.8m@kyoto-u.ac.jp

本稿は、地域住民を主体とした景観の計画・運営のための実践理論を基礎づけることを目的とする。本論では、ベルクの風土論を基礎として風景の持続性の概念とその意義を示した上で、木岡による風景認識の構造論的な把握と動態論に基づき、「語り」による風景価値の発現と共有、実践へと展開する景観の計画・運営の理論的枠組みと方法を示した。また、風景の持続性の根拠となる通態的關係（風景の見方と構築環境の相互関係）を取り上げ、いくつかの具体的な歴史上の風景の価値づけと造景表現の関わりを示すとともに、暗黙的实践のなかからの風景の表象化の可能性について論じ、風景の持続性を支える景観研究のアプローチと課題を示した。

Key Words : *landscape and sustainability, narrative-based landscape management, milieu, Augustin Berque, Nobuo Kioka, landscape representation*

1. はじめに

日本の社会は今、大きな転換期にある。環境問題、経済的衰退や高齢化などの社会問題に対し「持続可能な社会」の構築が目指され、一方では近代思想を超える哲学が求められている。人々が自らの「生きる意味」を考え直す必要性が生じており、それと同様に、われわれの生存基盤のあり方を考え直す必要性が生じている。大災害によって失われた風景を再生する試みはその一例といえよう。われわれにとっての「郷土」の景観、さらには「日本」の景観の意味を再考することが求められている。これらの問題に対して、最も有意義な議論を展開しているのが、西田や和辻哲郎の流れを組むオギュスタン・ベルクの風土論であり、それを基礎とする木岡の風景論である。彼らの哲学的考察の成果は、風景づくりの実践の理論的基礎に十分なり得ると考えるが、実際には計画理論としてこれを論じ展開する試みはほとんどみられない。本稿は上記の問題意識に基づき、この風土論を再評価し、これをもとに日本における景観の計画・運営のあり方を考察する。本論の意義はこの点にある。

人間は自身の生きる環境を、いろいろな象徴を通じて理解し、さまざまな技術をもって利用してきた。ベルクの風土論においては、自然の環境と人間の風土とが明確に区別され、「風土」とは「大地の広がりに対する人間集団の関係」、 「人間が、地球の広がりに対して生態学

的、技術的、象徴的にもつ関係」であるとされる^{1),2)}。

この関係としての風土のおもむき（風土性）を再構築するという視点は、構築環境の均質化や没個性化に対抗する風景の持続・再生において不可欠である。

本稿では、ベルクと木岡の風土論/風景論を基礎として、風土性を尊重した景観形成を目的とする実践理論の枠組みについての考察を試みる。まずは、ベルク風土論の再検討を通じて「風景の持続性」という概念を示し、それを評価する意義について論じる（2章）。次に、ベルク風土論を理論的基礎とする木岡による風景認識の構造論的な把握と動態論に基づき、「語り」による風景価値の発現と共有、実践へと展開する景観の計画、運営¹⁾の理論的枠組みと方法を示す（3章）。さらに、風景の持続性の根拠である通態性（風景の見方と構築環境の相互関係）について、歴史上の風景の価値づけと造景表現の関わりを示すとともに、暗黙的实践のなかの風景の表象化の可能性について論じ、風景の持続性を支える景観研究のアプローチと課題を示す（4章）。考察対象は、文学作品等にもみる伝統的な風景表象や近代風景観に基づく言語的風景表象、景観形成上の型としての造景の表現、非言語的感覚としての場所への愛着、学術知による新たな風景的表現である。

2. 風景の持続性について

(1) 持続可能な開発と景観

環境と開発に関するリオ宣言（1992）以降、国内外において環境の持続可能性の原則が主張され、「生活の質を成長させることをあきらめない」成熟都市のあり方が模索されている。日本では近年、地域の歴史・伝統・文化の復権を掲げた事業化が進められつつあり、都市の歴史・文化やそれを表す景観が都市戦略上においても重要な意義を持ち始めている。今後さらに多元化する社会の中で、地域住民がその地域の風土的個性を背景に、文化的独立性と自立性を獲得していくことが期待されている。

欧州においては、国際条約として 2000 年に欧州ランドスケープ条約（*The European Landscape Convention*³⁾）が成立し、以後各国の景観計画を基礎づけている。用語の概念における議論では、ランドスケープとは領域であり、空間であり、眺め、イメージであること、また、実体でありかつ表象であり、これらは相互に関連し合い切り離せないことなど、その概念の多面性、複雑性が認められている⁴⁾（芮, 2010）。条約の目的には、文化遺産としてのランドスケープの保全の基盤となる社会の持続可能な発展が明示されており、目標として個人/社会の安寧（*Individual/Social Well-being*）やアイデンティティの確立が強調されている。身の回りの日常の景観（意識されにくい風景、醜い風景も含む）が施策対象として重視され、文化景観（*Cultural Landscape*）の保全、育成は主要な取り組みとなっている⁵⁾。

景観施策上の課題としては「総合性」が挙げられ、ランドスケープの計画を広域および都市計画に総合し、文化政策、環境政策、農業政策、社会政策、経済政策などの関連する政策において、総合的に実施することが主張されている。このような施策上の課題や基本的な概念は欧州と日本において多くが共有できるものである。

(2) 風土論からみた風景の持続性

ベルクと木岡は地理哲学としての風土学を提示し、体系的に論じている。本節では風土論の考察を通じて、風景の持続性の概念を明確にするとともにその意義を示す。

a) 風土における通態性

風土論の枠組みにおいて、風土と自然環境ははっきりと区別されている。人間は客観的な環境（*Umgebung*）の中に生きるのではなく、ある種特有の環境世界（*Umwelt*）を作り、その中に生きる。すなわち、環境が人間によってある形に述語化（西田哲学の述語世界の説）されて風土が成り立ち、風景とは環境を「風景」という述語として捉えることで生まれるものである、というのが風土論の立場である。風景は特定の風土のうちに、

特殊な文化的背景のもとで「発見」されて生まれる歴史的所産であるとされる^{6,7)}。

さまざまな風土において固有な知覚の図式が成立し、その型にしたがって風景的なものの見方が展開している。風景は表現されることで他人に伝えられ、それが集団的・社会的な表象・表現になれば、その風景の見方を規定する働きをもつようになり、さらに、この見方にもとづいて現実の環境を保護・保全整備、改変整備し得る⁸⁾（樋口, 1989）。環境は文化をもつ社会によって知覚され、その文化特有の仕方では理解される一方、社会の側から環境への物理的な働きかけが行なわれ、構築された環境が知覚をより方向付ける。この繰り返しが起こり風土性が成り立つ。ベルクはこれを「通態性」と定義づけた⁹⁾。風土においては、物理的環境と人間の知覚の図式・観念とは相互に通い合う構造を持つ。

風景の持続性は風景の見方と構築環境の間の通い合う関係性「通態的関係」のなかに認められる。風景が持続するとは、環境をある状態で保持することを意味するのではなく、発見され育てられてきた見方で風景を眺められる状態にあることにほかならない。それは、環境のなか、身体（見方）のなかに、風土のおもむきを受け継ぐことある。景観の計画・運営においては、環境とその環境に対する人間の認識のあり方の双方が重要である。

b) 存在の基盤としての風土

ベルクは認識論から存在論へと議論を展開する。人間は空間的・時間的（もしくは地理的・歴史的）に限定された存在であり、我々の身体は風土に根ざしている。風景はわれわれ自身の暮らしの履歴を表している。さらに、風土が人間の「存在の自己客体化、自己発見の契機である」という和辻の考え¹⁰⁾に基づいて、ベルクはさまざまに異なる風土を生きる人間にとって、風景が自己了解の手がかりとなること、人間の生きる感覚を動機づける力になることを示した¹¹⁾。さらに、自らの生きる風土を意識し、積極的に実践において表現しなければならない、と実践の意義を訴える。

われわれのアイデンティティの拠り所は風景のなかに認められる。風景の持続性、独自性を認めることはわれわれ自身のアイデンティティを支えることを意味する。一方、風景を風土性に基づき持続的に整備することは、われわれの、また将来世代の存在基盤を強固にすることにほかならない。特に多元化する社会においては、より重要性を増す。環境倫理と公共性の議論は、風土性を、そして風景の持続性を認めてはじめて可能となる。

c) 風景づくりの実践の意義

以上をふまえると、風土を理解し風景を適切に計画・運営することは、アイデンティティの確保ならびに持続的な安寧社会の実現において不可避であるといえる。では、風景の持続を実現するための方策はどのようなもの

が考えられるであろうか。

第一に、人々が環境との間に築いてきた関係、すなわち「生態学的、技術的、象徴的にもつ関係」を理解することが最も基礎として重要である。各時代において発見してきた風景やその見方を客観的に評価し、現代に生きる我々の知識とすることは、風景の持続性の評価の基礎となる。また、自らの生きる風土を客観的に理解することは、将来世代も含めて、自我の発揮、自己実現、相互承認、文化創造の基盤となる。第二に、風景づくりの実践により、風土性の再構築を目指すことが重要であり、その方法論上の課題が本研究の主題となる。

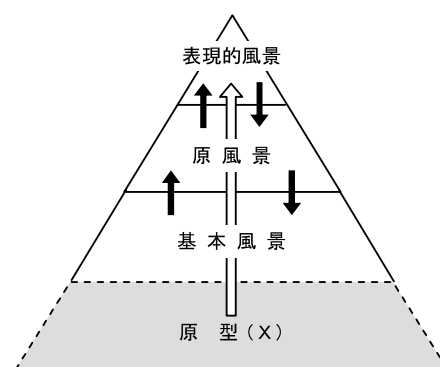


図-1 風景経験の諸契機の構造 (木岡, 2007)

3. 景観の計画・運営の理論的枠組み

(1) 風景づくりの実践としての「語り」

風景とは基本的には個別的で主観的な経験であり、それ自体は共有可能な客観的な経験にはなり得ない。しかし、個別の経験もそれが語られ、複数の主体間で共有されることで、共同的な経験へと変化する。景観の計画・運営においては、風景はそこで暮らす地域住民によって認識され形成されているため、地域住民の「当事者性」を考慮する必要がある。さらに特定の風景の価値づけに基づいた社会的規範を形成するためには、住民が自らの生きる風土に対する意識や関心を拠り所にして、共同的な経験を形成するほかない。

木岡はベルクの風土論を理論的な基礎としながら、風景の経験を分析的に記述するにあたり、構造論的視点を取り、風景経験を三つの構造契機（基本風景、原風景、表現的風景）の連続的展開によって説明する独自の立場をとった。すなわち、風景経験を、1) 〈原型〉に根ざした経験のうち、未だ「表現」の契機に至らず、日常的生における個々の暗黙的な実践のうちに生きられる風景〈基本風景〉の段階、2) 言語的媒介としての「語り」（物語）の集団的実践をつうじて具体化する経験となり、ある社会集団にとって意味をもった風景〈原風景〉の段階、さらに、3) そうした共同的・社会的な経験の中から集団に対する個の自覚によって生み出される〈表現的風景〉の段階、の3つの契機³⁾から説明した¹¹⁾ (図-1)。

これまでも、風景が発見され共有されて、ある型をもって環境を改変する、という図式はさまざまな論者によって論じられてきた¹²⁾。これに対して木岡は主体的実践による風景経験の変化を構造契機間の変化として認め、風景経験の動態論として展開した。すなわち、風景経験は、個々人の経験のなかから、「語る」という相互的な言語行為を通じて、個別の経験は共同的な経験へと変容し¹³⁾、集団的経験としての原風景が成立するというモデルを示した。契機間の変化は、個の自覚に基づく表現的

経験が成立する〈上昇の過程〉と、一度成立した表現的風景が下位の原風景を規定するような〈下降の過程〉による。この過程のなかで、風景は「語り」により物語性を帯び、「語り合う行為」により、共同的な経験を支える「物語の空間」が出来上がっていく。

この木岡の風景の構造論的な整理と「語り」による動態論の概念は、風土へのまなざしに基づいた「わがまち」風景の発見、その価値共有と共同の実践という風景づくりの実践理論の基盤となり得る¹⁴⁾。風土のおもむき（風土性）の再構築を目指した風景づくりの実践においては、「語り」に基づく風景の表象化と各契機を導く方法が課題となる。

(2) 「語り」の計画論への展開

a) 景観の計画論の枠組み

景観の計画・運営においては、環境に向けた自身の視線を客体化することで風景を維持管理するという視点が必要である。実際の風景づくりやそのワークショップの場などにおいては、ややもすると目的や目標が曖昧になりがちである。完全なものでなくとも、明確な枠組み設定は客観的な計画・運営には不可欠である。木岡の「語り」を軸とした風景の動態論を理論的基礎とすれば、景観の計画論の枠組みとして、以下のような計画論的各段階を仮説的に示すことができる。

- 1) 風景に対する無意識（の段階、以下同様）、
 - 2) 風景の個人表象化、
 - 3) 「語り」を通じた風景の集団表象化、
 - 4) 風景づくりの実践、景観の保全・整備への参画、
- である。ただし、この枠組みの有効性は実践のなかで検証される必要がある。この枠組みが有効であるとすれば、各段階においてはどのような計画・運営が期待され、いかなる手立てが有効となるか、その具体的方法が課題となる。木岡の「語り」の概念から、景観計画における方法論へ展開することを試みたい。

景観計画は、住民の意識の変化やその変化のプロセスを考慮したダイナミックな計画として運営されなければ

ならない。一方で、計画における各段階、すなわち価値発見の段階、意見交換・交流・提案の段階、問題解決や社会活動の意思決定・合意形成の段階においては、それぞれ目的や目標が異なるため、方法を分けて検討する必要がある。

b) 風景価値の顕在化

風景に対する意識を育てる初期段階（風景価値の「顕在化」の段階）においては、環境を風景として眺めるための対象化の作業が重要となる。様々な風景価値のあり方を参照し、風景に対する見方を鋭敏にしつつ、身の回りの環境に対する潜在的な価値意識を掘り起こし、それらを風景として再発見し再定義していくことが求められる。このような風景価値の発現のきっかけづくりなどの支援を行いながら、住民を中心とする多様な関係主体の出会い、話し合い、学び合いを通じて、人々の多様な関心や想いの共有や理解が進むことを重視する必要がある。また、言語や概念によって表現の難しい精神的景観や暮らしの価値については、その感覚の共有を図ることや、共感を促すための対話の場を設けることも重要であろう。風景に対する価値づけの段階においては、景観に対する様々な側面からの学習が有効であり、専門家にはこの支援も期待される。

各計画的段階において実際に有効であると考えられる手法について整理した（表-1）。いずれの段階においても、実践行為は風景への関心を抱き所にするため、風景に対する人々の関心を育て、その価値が内面化されることが重要である。一方で、社会的実践においては、選択・意思決定の自由、多様性と非排除の確保をしておくことも必要であろう。そして、様々な活動を通じて、住民の主体性や担い手としての当事者性が育まれることが期待される。

c) 風景価値の規範化

特定の風景の価値づけに基づいた風景価値の「規範

化」の段階においては、目指すべき目標像の設定、価値の序列化とその共有、シナリオもしくは戦略の設定、施策実行に向けた合意形成のための対話と協議、アクションプランの実施や事業（整備、管理）への参画・協働などが期待される。このような風景の規範化に関わるコンセンサス形成の方法については、ユルゲン・ハーバマスの理論的基盤¹⁴⁾の上に、パツィ・ヒーラー¹⁵⁾らによって理論化が進められている協働的計画理論^{16),17),18)}が参考になる。本理論は「知識や価値は社会的相互作用的過程によって積極的に構成される」という社会構成主義の考えに基づき、複数で多様なステークホルダーの関心のなかから問題を定義し、知識資源を引き出して解決策を表出し、それを実行するためのアイデアを展開する社会的プロセスとして計画を捉えている。その背景には、知識や推論のコミュニケーションは合理的体系的分析に限られず物語や感情表出的表現も含みうることであり、個人の選好は独立に存在するのではなく社会的文脈や相互作用の中における学習によることに対する認識がある¹⁹⁾。競争的な利害交渉では解決できない問題に対して、協働的なコンセンサス・ビルディングが必要であることが主張されており、そこでは、対話を行い諒解が形成されることに対話的合理性（*communicative rationality*）が認められている²⁰⁾。対話においては、価値の多様性の認識と、様々なステークホルダーの創意の結集が計画上の課題となる。コンセンサスの形成においては、知識や推論のコミュニケーションは合理的体系的分析に限られず物語や感情表出的表現も含みうることであり、個人の選好は独立に存在するのではなく社会的文脈や相互作用の中における学習によることも積極的に認められている¹⁶⁾（角松，2010）。

また、実践の段階においては、多様な景観資源の活用や創出が重視されるべきである。その際、吉村が指摘するように、対話と交流を通じた想いや方向性を共有した上で生み出された様々な活動（*action*）が基軸となり、その

表-1 風景経験の動態論に基づく景観の計画・運営の枠組み

風景づくりの各段階	目標	有効な手立ての例
1) 風景の個人表象化	景観の対象化、発見・気づきの支援 景観に対する意識の育成 景観の成り立ちや仕組みの理解	景観資源調査への参画 ワークショップ等による意識化の機会形成 学習、専門家/外部者との意見交換
2) 「語り」を通じた集団表象化	「語り」の場づくり 多様なステークホルダーの参画 多様な風景価値の発現、認識 ソーシャルキャピタルの形成	住民主体の活動等を通じた対話の場の形成 大規模なアンケート、フォトコンテストの開催 による発意機会の拡大と発信情報の共有 活動を通じた住民間の信頼・協力関係の構築
3) 風景価値の共有と規範化 個の表現と積極的实践	目標像の共有、価値の序列化 実行計画の方針策定・実施 事業への参画と協働体制の構築 価値規範の構築	ビジョニング、シナリオ・プランニング等による 目標像の設定・明文化、既存計画への適用 住民主体の事業化の支援、各種事業の活用 ガイドライン等による変化許容量や最低確保 基準の設定、ルールづくり

編集作業の結果として計画 (*plan*) が構成されるような景観計画 (もしくは風景づくり) のあり方も想定されるべきである²¹⁾。計画が活動先行型 (*action-oriented*) で進められる場合には、その活動の方向性を緩やかに合わせるといふ合意形成の仕方も重要となる。

d) 価値規範の担い手としての住民の役割

風景づくりの実践においては、地域住民が自ら、景観の評価、計画、管理の一部を担うことも必要となる。しかし現実の都市においては、同じ地域に住んでいる住民の間では、仕事もライフスタイルも趣味教養も、様々でばらばらである状況にある。このような状況において、風土性を支える社会集団はいかにあるべきか。この問いに対して、ジーバーツの視点は示唆に富む²²⁾。すなわち、地域住民が、生活に必要な行動に根ざした集団としてではなく、生活様式・ライフスタイルとして特定の生き方を「選択」することによって、文化的社会集団として都市空間の再生に関わるという視点¹⁹⁾である。ここには、まちづくりや風景の再生といった「共通の関心」を通じて地域住民が自ら「選択して」共同体を形成する可能性を示している。

風景づくりの担い手となる組織 (*Association*) の形成・連帯においては、社会関係資本 (*Social Capital*) が基盤となる。社会関係資本は、人びとの社会的なネットワークのなかで共有される規範、価値、信頼を含み、そこでの関係性を通じて人びとの協力や共同行動を推進し、共通の目標と相互の利益を実現するために貢献する²³⁾。7 (吉村, 2006)。風景づくりの実践においては、社会関係資本の成熟が不可欠であろう。このネットワークは利己心ではなく、同感や共感の中核とする道徳感情のシステムによって支えられるため、同感や共感を促す場づくりが求められる。

風景の規範化は、社会関係資本に基づく社会組織 (*Association*) の主体能力に依存するため、風景づくりのプロセスを通じて主体能力の構築 (*capacity building*) は重要な課題である。そのためには、さまざまな機会の拡大が望ましい。この機会とは、資源の発見、地域の学習、価値共有や合意形成をめざした対話、発意、事業参画のようなものである。施策面からいえば、質の高い対話を有む上記のような機会を与えること、政策へと発展できる環境を整えることの重要性を指摘できる。

4. 現代における風景の表象化の可能性

(1) 風景表象の多様性と可能性

これまで持続可能な風景づくりの実践の枠組みについて考察してきたが、実践においては風景がいかに発見され表象化されるに至るか、何が「語る」べき風景表象に

なり得るか、われわれが環境を構築する際に何が拠り所となるか、という課題がある。このような課題に対して、歴史上の風景表象の内実を再吟味し、表象と構築環境 (造景行為) の間の多様な関係〈通態的關係〉を学術的立場から検証し評価することは、風景の持続性の根拠として不可欠である。また、暗黙の実践のなかの表象以前の風景から、新たな風景の表象化の可能性を探ることは、より意識的な風景の「語り」を導く上で意義がある。これらは現在の風景づくりの実践における「動機づけ²⁴⁾」になるとともに、風景表現の可能性をより大きく開く。しかし、本主題に関する研究は様々な分野において散見されるが、体系的なものにはなっていない。

たとえば歴史上の風景表象の典型として、ヨーロッパの古典的風景、崇高、ピクチャレスク、ロマン主義、アメリカのウィルダネス、日本において神話、歌、物語に表れてきた豊草原、雪月花、花鳥風月、深山幽谷、八景、白砂青松、奇岩怪石、山紫水明などが代表的なものとして挙げられる²⁵⁾、²⁶⁾ (西田, 2011 など)。一方で、風景の表象化に至らないが重要な感覚がある。たとえばアニミズム、カミ、精霊などの見えない存在に対する畏れのような感覚であり、また、場所への愛着も表象化されにくい感覚である。

近年では、生業や産業の風景など日常の風景の価値づけが行われ、文化的景観という枠組みでの景観の再評価や景観保全・修景の取り組みが進むなど、風景表象の枠組みが拡張し続けている。以下では、これらの風景表象の多様性と可能性について論じる。

(2) 言語的風景表象と造景表現

風景体験においては、知覚のみならず心象や観念などが深く作用する。神話や伝説の風景、神仙境、浄土の風景など、日本人は自然に対して宗教的、歴史的、文学的な意味づけをおこなってきた。環境に対する特定の表現や観念が文学作品などの表現に表れ、それが環境に対する支配的なイメージとして鑑賞者の態度を規定すれば、特定の意味づけを有した表現も〈型〉として受け継がれ固定化される。このような見方となった文学作品などにみる風景表現がいかに集団表象化され景観を形成したか、また、言語的表現に至らずとも社会に特有の観念が、どのように景観形成に影響を与えたか、というのは景観研究の重要な主題である。

ベルクは、風景の「発見」を認めるための独自の基準を 6 つ挙げ¹⁸⁾、最初の風景の誕生は五世紀の中国において、謝靈運 (385-433) の詩作品等に自然についての考察がみられることとし²⁷⁾、文官階級の余暇が隠遁の趣味を生んだ関係を論じる²⁸⁾。以後の風景の表現は、和歌、漢詩、物語などの文学²⁹⁾、謡曲などの芸能、倭絵などの絵画などに引き継がれながら³⁰⁾、後世の人々の風景の見

方や、見方に基づく景観形成に大きな影響を与え続けた。一方、寺院においては宗教的世界観の投影によって、その周囲の景観に特有の意味が与えられたことも明らかにされている。浄土教寺院における浄土の光景³¹⁾、禅宗寺院における境致³²⁾はその代表的なものである。

以下では、歴史上の風景表象を体系的にはではなく、筆者のこれまでの研究との関連に限定して、いくつかの事例を取り上げて考察を行う。

a) 山と神社仏閣

たとえば「山」に関して様々な風景表象が確認できる。高橋康夫は、京都の山に対する観念的イメージについて、神なる山（神の住む山）、国見の山、歌垣の山、青垣山、葬地としての山（死者の住む山）、修験の山などの伝統的・土着的な観念に基づく見方と、須弥山、玄武の山（北岳）、神仙の山（三山、五山と南山）、鎮めの山（五嶽、五岳）などの渡来思想に由来する観念に基づく見方を挙げる³³⁾。このうち、神なる山、国見、歌垣の山、青垣山はいずれも「万葉集」にしばしばみられる表現である。万葉集の時代は、中国六朝時代の南朝文化における自然や山水の賛美の態度から影響を受けつつ、山やその周囲の自然に対して、親しみを込めたまなざしでその精神の清浄さや生産の豊穡さが詠まれた³⁴⁾（上垣外、2002）。山は古く信仰の対象であったため、神への信仰や浄土思想などの宗教的世界観を背景として、深山などの独自の山の風景の見方も生まれた³⁵⁾（笹川、2004）。日本の密教も自然崇拜的な傾向が強く、日本の豊かな樹林に覆われた深山の木々、岩峰に特徴づけられる雄大、神秘で深遠な大自然への没入の傾向がみられる³⁶⁾など、山に関する風景表象は宗教的観念とは切り離せない。

このような山に対する意味づけは、眺望景観を含む庭園の意匠や造形表現³⁷⁾や、庭園と周囲の山や敷地内の建築、時に周囲の川に至るまでのランドスケープの設計に影響を与えてきた³⁸⁾。たとえば、浄土宗寺院における浄土世界の視覚化においても、無量光院における金鶏山など、山が用いられた³⁹⁾（本中、1997）。山の形態とそれに対する意味づけについて、齋藤は「神としての山」の意味づけが山岳の頂部の尖鋭性と関係すること、「仏としての山」の意味づけと（こちらを向いた）平滑な斜面との関係を示しつつ、山の見えと社寺の立地の関係を示した⁴⁰⁾。また、神山は風景記述と山容形状の分析を通じて、京都の北山において視覚的に優れ、明瞭な山容が見える場所のほか、山への入り口、山の麓、山に囲繞される場所において葬送地、社寺、山荘が立地し、これらの場所において霊山、浄土、神体山、風水の主山などの様々な風景表現がみられたことを示した⁴¹⁾。このほか風水思想は都市の設計にも影響を与えたとされる⁴²⁾（黄、1996）。このような地形が形成する眺めや空間と、そこに人間が見出した意味やイメージ（神聖性、精神性など）との対

応関係を把握することは、現代に生きるわれわれの山々の風景に対するまなざしを豊かにするとともに、その風景の再価値づけに貢献する。

b) 四季・草花と景物の名所

和歌文学や物語文学にみられるような四季の風景に対する日本人の感覚による風景表象の豊かさは、咲く花に時勢や人生の全盛を重ね、落葉に長楽を、秋の夕暮れに寂寥を重ねるなど、その表現は様々な意味づけを得て、固有の景物を数多く生み出した⁴³⁾（唐木、1970）。花鳥風月の景物も宗教的な観念の影響を受け、たとえば平安期に万葉歌人が最も親しんだ梅から「散る桜」へと人々の関心が移ったのも仏教的無常観の影響が大きい⁴⁴⁾（西田、1972）。なかでも本居宣長の説く「もののあはれ」、すなわち事や物の心を理解するにはこちらの側の心（情）において同感、感受するほかないとする考えは、日本人の風景の見方の特徴を簡潔に示す。面白いことや嬉しいことよりも悲しいことや恋しいことの方がより心を動かす、といった日本人の選好の性格は、散る紅葉、時雨や露などの景物に感情の翳りと深みを与え、多くの景物とそれを愛でる名所を生んできた。そこには古来の景物とイメージの間の豊かな関係が見出すことができる。

たとえば嵯峨野には、祇王寺（平家物語）、時雨亭（藤原定家の山荘）、野宮神社（源氏物語）などの旧跡が、近世以降も幾度の再興を経て受け継がれ、それぞれ紅葉や柴垣などの景物を維持してきた。その周囲の景観も、山深い囲繞景観や草庵風の屋根や垣などの意匠など、和歌や物語の表現と合致する様に形成・維持されてきたために、物語の心象風景を追体験できる名所として継承されてきた⁴⁵⁾（山口ら、2007）。ここには文学表現を契機とする風景表象と構築環境との密接な関係（すなわち風土の通態的關係）と、その再構築のあり方をみるができるため、風土性の継承という視点でみればその好事例といえる。

c) 山里・仙境と別業・山荘

平安時代の初期において既に、眼前の山水を眺めて神仙境を想起する表現がしばしばみられる。急峻な岩壁、溪流、古木の茂る林などは山水画に表れる理想郷としての仙境の風景の典型である。俗塵と山水とを対置させる考え方は、道教的山水思想や老荘風の隠遁思想、および山水仁智の儒教的自然観の影響を受けたものであり、六朝時代の「文選」などを通じて、道教的自然観の顕著な「懷風藻」（751）や平安初期の勅撰詩集へ大きな影響を及ぼした⁴⁶⁾（家永、1947）。

「古今集」（905）の時代の平安京の郊外においては、都に対する仙境、寂寥や孤独の地、憂き世からの逃避先としてのイメージに基づき「山里」という象徴的場所が形成された。その後時代を経て文人貴族の趣味的な隠遁生活の場と捉えられるようになった⁴⁷⁾。そこで選ばれた場

所が野であった。内藤湖南は日本の風景の特徴として、桜花、松樹に加えて「裾野の景色」を挙げている⁴⁸⁾が、野の山里の興趣は、中世以降の隠遁詩人らに引き継がれ、厭世・末法思想の中で、さらに発展され、茶の湯、数寄へと展開していった⁴⁹⁾ (西田, 1979)。

このような風景表象は単に文学上の表現にとどまらず、別業の庭園の意匠や立地選定にしばしば関わった。実際に平安時代の貴族は漢詩・和歌や管弦・主宴の場として別業を造営したが、これらは京都の特に著名な庭園の起源となり、日本の風景史上きわめて重要な位置づけを有する。その造営地には山に囲まれ視覚的に閉鎖された領域空間の内側にあり、見通しに優れた場所が選ばれた⁵⁰⁾ (山口・川崎, 2008) が、これは都とは異なる場所として認識されるために必要な空間的条件であったと考える。古典文学の舞台となった場所は、地形を主とする景観特性によって強く性格づけられており、このような性格が文学表現等より明確に意味づけられ、生きられた場所となっていく。山の辺、山裾、谷口など、その景観に特定の意味づけが与えられてきた場所では、その場所の性格を風景資源として、開発や保護において配慮すべきである。

d) 近世の名所における風景の生成

近世において講、開帳、年中行事などに基づく寺社参詣を中心に庶民の旅が盛んになり、多くの名所が形成され、その旅は旅文学 (旅・巡礼回遊・漫遊など) や絵画・版画などにさまざまな形で表れた。紀行文の風景記述に表れる風景鑑賞形態をみると、たとえば近世の嵯峨野では、鑑賞対象としての歌枕・四季の名所、物語・故事の旧跡、眺望地点や神社仏閣などにおいて、文学的イメージの追体験、視覚的風景の観賞、舟遊などの遊び等の風景鑑賞形態が確認できた⁵¹⁾ (山口ら, 2010)。歌枕・四季の名所においては古歌の引用やそこに詠まれた景物の探索・鑑賞が行われ、物語・故事の名所においては文学的イメージの享受やあはれの追体験が行われ、いずれも表現された景物を探索・鑑賞する態度がみられた。

同じく近世の文人たちの風景鑑賞形態として、大室幹雄は、文人たちが漢学の教養を背景とする江戸シノヅワリの風景作法と美意識をもって、風景を享受していたことを膨大な事例の考察を通じて示した⁵²⁾。たとえば月ヶ瀬に遊んだ中村栗園らは花月の奇、梅花と流水、雪梅の清、夜月における梅花奇麗の観などを嘆賞したが、これらは風水雪月花の定型を逸脱しない範囲に限られた。

また、西嶋・仲間は、近世の瀬戸内海の風景について、洞庭湖・瀟湘八景の風景の見立てから神仙境のイメージへの拡大と、意味づけの深長化が行われ、新たな風景が生成される過程を確認している⁵³⁾。これは型となった見方をもって眼前の景観を体験する際に新たな風景が生成する可能性を示している。

近世には出版の興隆を背景にさまざまな古典文学が流布するとともに、故事来歴を並べた名所案内記の類も多く出版された。古典の中のテキストを読み解き、追体験する風景鑑賞形態が教養人の間で広まっており、近世においても風景の再解釈とそれにとまなう新たな風景の生成が常に行われていたと考える。これと同時に、文学的表現や史実に基づく造景行為もみられ、これらの内実は検証の必要があるが、通態的關係の再構築のあり方を探る上では重要な研究対象となる。

e) 近代的風景と景観保全

日本の近代における風景観の変化については、既に多くの研究の蓄積がある⁵⁴⁾が、その論点として 3 つの視点を取り上げる。

第一に「武蔵野」にみられる雑木林や平凡や農村風景の風景の発見に代表される、自然主義的、ロマン主義的な文学表現や作家のまなざしによる風景の発見 (小寺⁵⁵⁾、柄谷⁵⁶⁾や加藤⁵⁷⁾、川本⁵⁸⁾、樋口⁵⁹⁾の研究など) が挙げられる。この武蔵野は大正 6 年の井の頭恩賜公園、同 12 年の多摩霊園の開園のほか、昭和 5 年の風致地区指定 (善福寺、石神井、洗足) など、雑木林の風趣や湧水池景観の保護へとつながっていった⁶⁰⁾ (山根ら, 1990)。

第二に、アルピニズムの流入や自然地理学の発達にもなう山岳や奇岩、溪流の景観の鑑賞対象化⁶¹⁾ (大室, 2003) と、名勝としての保存運動の展開⁶²⁾ (黒田・小野, 2004) が挙げられる。旧跡・史跡は古社寺と同様に保護の対象とされた。名勝も同様であるが、庭園などの対象にとどまらず自然風景地の保護へと展開し、大正期には名勝の「展望地点」までもが保護対象として取り込まれるに至った⁶³⁾ (上村ら, 2010)。昭和 2 年の日本新八景や日本百景には海岸、湖沼、山岳、河川、渓谷、瀑布、温泉、平原の 8 つの部門が設けられたが、この分類は当時の風景観を端的に表している。自然風景地において見出された新たな風景は、国家観の形成や国策としての観光施策の推進を背景に、国立公園運動や、各地の公園指定運動と結びつけられていった⁶⁴⁾ (西田, 2011)。

最後に「ふるさと」の風景を取り上げる。尋常小学唱歌 (文部省唱歌, 1911-14) の歌詞は、そのほとんどに里の風景や自然の描写があり、それらは特定の場所を舞台としないきわめて抽象的なものであった⁶⁵⁾ (小野, 2005)。小野は、唱歌や昔話が農村に日本のふるさとというイメージを付与したと指摘し、それが現在の日本のふるさととしての「里山」のイメージに受け継がれていると指摘する⁶⁶⁾。同様に、小学校国定国語教科書には田園景を主とした無名の景観美がしばしば描写され、国民的原風景としての定着に影響した⁶⁷⁾ (勝原, 1979)。さらには、地域景観イメージを代表する校歌においては、全国の調査によると、山、川、海の出現率が高く、加えて野や丘がしばしば歌われており、地形要素が卓越してい

ることが示された⁶⁸⁾ (矢部ら, 1995) . このような国民のアイデンティティとなる風景イメージは歴史的に創造され, 現在にもなお大きな影響力を与え続けている。

このように新たな風景観の誕生は, 政策と結びついて景観の「保全」を推し進めた。保全も特定の価値づけに基づくものである。一方で, 旧来の風景観の衰退とそれに伴う構築環境の変容により, 風景は大きく変容した。この時代の風景の変容の実態を明らかにすること, また近代人のまなざしの地域性や多様性を明らかにすることは重要な研究課題である。

以上, 断片的ではあるが, ランドスケープの形成に関わる風景表象とその背景となる観念について概観した。風景を成り立たせてきた見方, 象徴体系やそれらを支える世界観には様々なものがあり, 現在失われた価値観も多い。それを現代において再び価値づけするための研究と実践の双方の蓄積が期待される。

(3) 造景表現の表象化

言語的表現によるものではない非言語の支配的なイメージや造形による風景の表現も, 景観形成上の様式や一定の型として定着することがある。

洋の東西を問わず, 理想郷としての庭園の造景は, 文学上の表現や特定の世界観の影響を受けて, それぞれの文化圏で異なる様式化の過程を示してきた。都市景観も庭園の景観表現から影響を受けており, よく知られるように, 西欧において 17 世紀頃から長い直線街路のヴィスタや幾何学的な広場が都市設計の手法としても用いられるようになる。これは 15 世紀の始めの画家による遠近法の再発見, 16 世紀の透視画法の流行の影響を受けてのものである⁶⁹⁾。また, ロマン主義文学やイギリス風景画の影響を受けつつ, 19 世紀前半にはジョン・ナッシュのリージェント・ストリートに代表されるようなピクチャレスク風の都市デザインが誕生した。

西欧においてはピクチャレスクの伝統を受け継ぎながらも, カミロ・ジッテ⁷⁰⁾やレイモンド・アンウィン⁷¹⁾ら

によって, 歴史都市の景観構造の分析を通じて伝統的な造景表現が概念づけられ, また技法として明確化された。20 世紀後半には, 機能主義的な観念⁷²⁾に基づく都市建設に対して, 前近代的な人間の豊かな暮らし方への回帰への動きが活発化する。たとえば, 英国のタウンスケープ学派は歴史都市が有する有機的な空間構造と, そこから得られる視覚的な喜びを認め, 分析的な手法で, 相互の景観要素の間にある関係の技法を「再発見」し, <連続する視覚>や, <ここ>と<あそこ>の効果など, 都市景観の視覚的な効果を発見的に示した^{73), 74)} (Cullen, 1961 など)。このような既存の景観構造から造景表現を発見的に解釈し計画言語化する研究活動自体が, 一種の風景表現となり, 現在にいたるまで都市景観の形成に影響を与え続け, また西欧の景観の持続性に貢献している。

このように空間言語として未だ確立していない景観上の表現に着目し, 伝統的な都市形態とその意味の解釈や, 風土に固有の造景的作為や意匠を読み解きを通じて, 空間言語を発見しようという動きは, 日本においては 1960 年代の都市デザイン研究体の活動に見出せる^{75), 76)}。以後も, たとえば宮本による城下町の研究⁷⁷⁾のように, 日本のいくつかの城下町においてヴィスタに基づく空間設計がなされたこと, 街路設定の見通しの基準点としての機能のほか, 軍事上の意味や景観上の目的を持っていたことが示されるなどした。

日本におけるこのような研究は, 都市よりもむしろ自然風景地や歴史的名所を対象としたものが目立つ。樋口・杉山⁷⁸⁾, 日高ら⁷⁹⁾, 谷本ら⁸⁰⁾の研究などは, 時代や場所, 目的によって建造物の立地選好に差異や多様性があることを示す。京都の神社仏閣においては, その造景技法として, 山との距離感に応じた敷地演出や, 遣水利用における段階的な作法秩序があることが示され⁸¹⁾ (山田, 2008), 京都の古庭園においては, 近傍地形特有の地形の空間特性を活かして囲まれ感と奥行き感の両立を満たす敷地構成の技法が示された⁸²⁾ (図-2: 山口ら, 2009)。

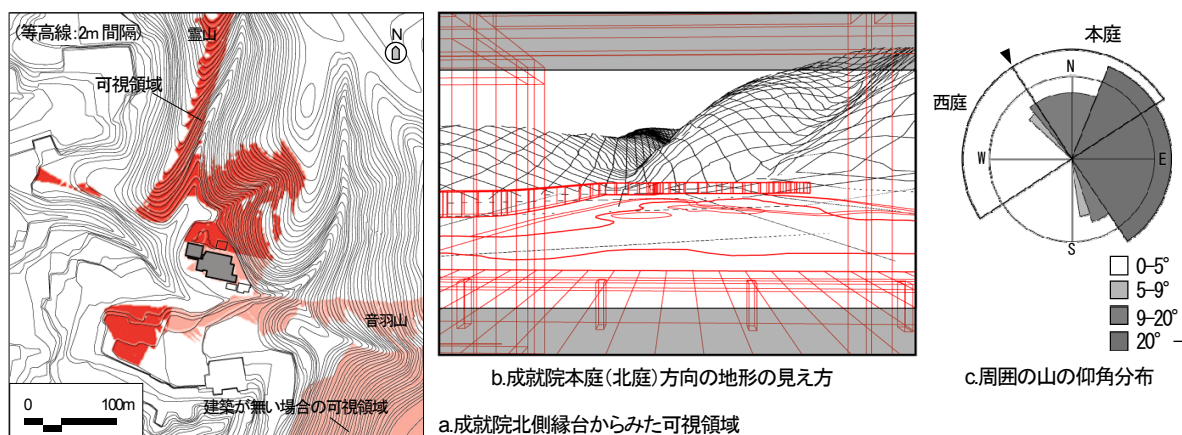


図-2 成就院庭園における視覚的構造と敷地構成

以上のように、非言語的な景観の形成原理や構成技法をその都市形態から発見的に導き出し、計画・設計のための言語化を行うという方法は、風景の表象化という点で見れば言語的風景と同様のアプローチといえる。

(4) 非言語的感覚の表象化

言語として表現されたり、型として受け継がれたりする風景が認められる一方で、人間は自らをとりまく構築環境には多くの場合無意識である。表象化に至っていない、場所に対する愛着や情緒的な感覚の享受、場所との感情的な結びつきなどは、暗黙的に享受されて、容易には言語化できない対象であるが、景観の計画や運営においても考慮すべき重要な主題である。そのような典型として「場所への愛着」を取り上げ、考察する。

地域のあらゆる場所はどうのように平凡であろうと、過去との連続性を表現している。その景観は、そこに長く住む人びとにとっては、愛着を抱く対象であったり、日常生活のなかで拠り所となっている場合がある。場所への愛着 (*place attachment*) は、Low&Altmanによる定義⁸³⁾では、1) 心理的には、特定の場面や環境に対する個人の認知的・感情的連結を意味するもの。2) 文化的には空間や土地の片隅での体験を文化的に意味深く共有されたシンボルに変化させるものとする。また、人と特定の環境との間の「感情的な絆」とも表わされる⁸⁴⁾ (園田, 2002)。場所への愛着については、自己と場所との一体感 (自分が住区の一部であり、住区が自分的一部分であるという感覚) がいくつかの事例とともに報告されており⁸⁵⁾、「根づきと関与 (*rootedness and involvement*)」 (Taylor et al., 1985) の重要性が指摘されている。実際、われわれは物理的に特色のある判別しやすい場所を好み、そこに感情と意味を付与する。そのような場所はくつろぎと安定感を与える。そして強い場所の感覚は私たちの自己認識 (*personal identity*) の支えになる⁸⁷⁾ (Lynch, 1976)。また、レイモンドは、個人的な愛着と、共有された歴史や関心に基づく共同体的な愛着を区分し、場所愛着の四つのカテゴリ、1) 場所への帰属、2) 場所への依存、3) 社会との絆 (家族、友人)、4) 自然との絆、を示した⁸⁸⁾ (図-3: Raymond et al., 2010)。

このような場所への愛着は、風景の表象化の基盤となる。人間と場所を結びつける要因としての、個人的ななじみ、過去の印象の強い体験、個人的/共同体的な帰属意識、景観の過去との連続性に対する認識などは、これまでの景観計画においてほとんど考慮されず、研究のアプローチも未だ成熟しているとはいえない。これを計画のなかで扱うには感覚の言語化により「語り」の次元の語彙とすることが望ましい。一方で、感覚の言語化・表象化には限界がある。言語化が不可能な場合も、たとえば地域の祭事のように、場所に対する感覚を共有する場

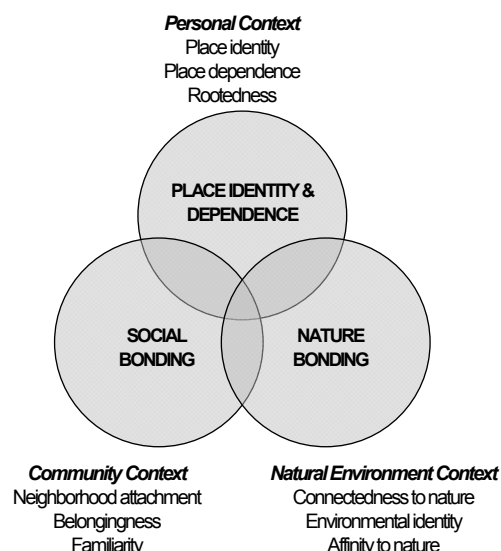


図-3 場所愛着の概念モデル (Raymond et al., 2010)

を設けることは意義があるであろう。

先人の歴史や自分たち自身の歴史 (ライフヒストリー) が環境の上に残した「痕跡」は、それを通じて先人との対話や過去の想起が可能であるという点で重要である。痕跡を有する場所は物語を後世へ伝える「記憶媒体」であるのみならず、物語を体験として伝え、新たな「語り」を生み出す基盤となる。個々人の記憶の中に埋め込まれている場所に対する個人的・集合的記憶を記述し蓄積性をもたせ、風景の持続のための手がかりとすることも模索されるべきである。

(5) 学術知による表象化

風景の価値づけにおいては、政治や学問が果たす役割は小さくない。学術知は景観の保存や計画・設計行為の根拠づけを担い得る。近年の風景の価値づけの典型として「文化的景観 (*cultural landscape*)」を挙げることができる。人間と自然との相互作用によって形成されてきた文化的景観の評価方法は複雑であり、景観の歴史・文化的構造や、その景観の背景にある社会構造の理解を通じて景観を評価する必要がある。

日本においては文化的景観に関する議論は、文化財保護法や景観法に基づく景観保護施策を中心として進められている。しかしその前提として、伝統的な生業のあり方や、開発にとともなう景観変容の歴史、それに伴う景観認識の変化などを主題とする研究は、歴史学や人文地理学の分野にとどまらず、1980年代以降の社会学や民俗学、1990年代以降の環境史など各分野において研究の蓄積があった⁸⁹⁾。これらの研究は、従来の風景に対する審美的な見方をこえて、様々な生業や風土によって培われてきた生活文化という視点から景観を捉え、それらを

価値づけてきた。たとえば、佐野は資源管理という観点から、生活や生業により形成された景観の成り立ちやその維持管理のあり方を明らかにし、人間と構築環境の間の複雑な関係を示した⁹⁰⁾が、このような学術研究は景観に対するより深い理解や関心の基礎となる。もはや景観評価の方法は、審美的印象評価などから大きく拡張しており、様々な側面から景観が捉え直され表象化されつつある。

また、風景に対する価値づけは、広く価値が認められたすぐれた景観にとどまらず、どこにでもある平凡な地域の「日常の風景」に広がりつつある。特にまちづくりの現場において、身近な景観に対するまなざしが重視され、生活文化の痕跡の再定義とともに、その景観価値の発見が試みられている。生活景の議論の中では、コミュニティによる日常的な維持管理の重要性が示され、場を中心としたコミュニティ自体のあり方までもが景観の議論の対象となるに至っている⁹¹⁾。さらには、景観のなかに社会関係資本の豊かさや、社会自体の健全性を見出すなど、新たな視点からの景観価値の定義づけや概念化が進められつつある。

(6) 景観研究・実践の課題と専門家の役割

前章で述べた景観の計画・運営の枠組みは、風景づくりの実践のなかで検証されることが必要である。また、風景価値の顕在化・規範化を導く手立てについても同様に、その効果が客観的に評価、検証され、改良されなければならない。実践のなかでの風景の表象化をめぐるのは、適切な観察と客観的評価によって、そのメカニズムについての知見が深められることが期待される。

そのほかにも景観に関わる研究者や実務家は、さまざまな役割を担うことが期待される。主な役割として以下の4点を挙げる。

- 1) 知覚的な質の記述とその手法の開発
- 2) 伝統的景観資源の評価、現代的再解釈
- 3) 風景の新たな価値づけの視点の提示と概念整理
- 4) 空間像の提案、景観計画の立案

1) ケビン・リンチは地域の感覚 (*Sense of a Region*, 筆者訳) という概念を示し、人びとが住んでいる場所の知覚的な質や人びとにとっての意味に着目し、そこで景観の体験が他のいかなる因子にもまして根本的であること、観察者と観察対象をともに考慮し、体験される環境の質を地域の尺度で計画すべきであると論じた⁹²⁾ (Lynch, 1976)。このような環境に対する「知覚的な質」を都市や地域のスケールで評価・計画するための方法論はいまも確立されるに至っていない⁹³⁾。表象化に至っていない、ある特定の社会集団が感じている潜在的な知覚的環境を記述すること、その集団が心理的満足を得る環境条件を探り、それをつくるように努めることが期待される。

2) 風景表象の読み解きを通じて、人間と構築環境の間に構築されてきたある時代と場所に固有の象徴的関係を把握し、その関係の保全や、現代への再生を試みることが期待される。客観的な評価・検証を通じて、まなざしを知識として身につけることで、はじめて人々はそれらの見方を学び育てることを選択できるようになる。象徴体系から見方を再び自らに埋め込む（還元する）ことも可能であり、それは新たな文化創造の基盤ともなるだろう。専門家は客観的評価と現代的再解釈の双方を慎重に行い、高い専門性に裏付けられた知見による影響評価を通じて、風景の見方に基づいた風土的関係の再構築を図ることが期待される。

3) 前節で述べたように、景観の理解に関わる歴史学、人文地理学、民俗学、社会学などの様々な分野を横断し、景観の成り立ちやその社会・文化的構造の観点から、学術的な新たな価値づけの視点の提示や概念整理が期待される。

4) 専門家が実際上の景観の計画や設計に関わることも重要である。計画の面では、都市や農村などの社会と環境の関係のあり方を把握し、景観形成のメカニズムを理解するとともに、景観の維持や持続可能な形成の方法を開発することが求められる。たとえば農村の田園風景において、その景観を支えてきた伝統社会や自立的な共同体社会、既存の土着的・伝統的システムのあり方を明らかにし、それを価値づけつつ、現代における代替的維持の方法（持続可能な観光、維持管理の負担軽減など）を構築することが期待される。一方、暗黙的な実践が必ずしも良好な景観形成に至っていない場合においては、その要因を把握し、制度設計を含み制度の改善や根本的対策の実施を行うことも重要である。また、実際の修景計画においては、客観的な事実に基づきつつ、地域に住む人々の感覚や動機を理解した上で、物語性や意味に基づいた象徴的な組み立てや、集合的記憶の可視化や実空間化を行うことが考慮されてよいだろう。

以上に述べたように、風景の表象化をめぐる議論とその景観の計画・運営への応用にあたっては、きわめて多様で幅の広い専門性が必要とされる。特に、風土の理解とその再解釈を主たる研究対象とする風土学もしくは風景史学の学術的展開が期待される。

5. おわりに

本論では、ベルクと木岡の風土論/風景論を理論的な基礎として、地域住民を主体とした景観の計画・運営のための理論を基礎づけること、その方法と課題を示すことを試みた。以下に考察の概要を示す。

第一に、ベルク風土論に基づき、風景の持続性の概念

の明確化とその意義を示した。風景は特定の風土において発見されるものであり、自己了解の手がかりとなることから、風景の持続は自らの/将来世代のアイデンティティ形成において重要な意義がある。風景の持続性は風景の見方と構築環境の間の通い合う関係性〈通態の関係〉のなかに認められ、風景の持続は地域住民が自らの生きる風土性を意識し、積極的に実践することで支えられる。その評価においては〈通態の関係〉が根拠となるため、風景表象と造景表現の間の関係を探ること、それを新たに見出すこと、が研究の主題となる。

次に、木岡による風景経験の構造論的な把握と動態論に基づいて、「語り」の観点から、風土に基づいた景観の計画・運営の理論的枠組みと方法を示した。すなわち、風景経験の各段階に対して、風景に対する無意識の段階から、1) 風景の個人表象化、2) 「語り」を通じた風景の集団表象化、3) 風景づくりの実践、の計画論的段階を仮説的に示し、この各段階の変化を導く風景価値の「顕在化」と「規範化」について、目標と具体的な手段、専門家の役割を明示した。

最後に、風景の持続性の根拠である通態の関係（風景の見方と構築環境の相互関係）を主題として取り上げ、現代における風景の表象化の可能性を探った。伝統的な風景表象や近代的な風景観については、風景の価値づけとそれにとまう環境構築（造景行為）との関わりについて考察し、歴史的な見方の発掘や現代的再解釈の必要性を示した。また、暗黙の実践のなかの風景の表象化の可能性を探り、景観形成上の型としての造景の表現、非言語的感覚としての場所への愛着、学術知による新たな風景的表現、について、景観の研究・実践のアプローチと課題を示した。

以上、本論全体を通して、風土に対する理解や風景についての「知」を、学術面で発展させること、ならびに、地域住民自らがそれを意識し、実践（計画・運営）することにより、各地の風景の持続と新たな創造を目指していくことの意義と方法について示した。

謝辞：土木計画学研究委員会には、名誉ある発表の機会を与えていただきましたことを感謝いたします。奨励賞受賞論文「京都の古庭園における地形的圍繞の構成と眺望景観の特性」は、川崎雅史京都大学教授と中島功氏との共著であります。川崎教授には私の博士課程在籍時に指導教授としての立場から多くの貴重な助言をいただきました。中島功氏による分析データの作成補助は本研究においては不可欠でした。また、樋口忠彦前京都大学教授と出村嘉史岐阜大学准教授には、本論文執筆時から現在に至るまで、研究活動を通じて多大なるご教示をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

補注

- [1] 景観の「運営」とはなじみのない言葉ではあるが、景観とは一挙に形成されるものではなく、地区社会を基礎として日常の意志決定のなかで形成されていくものである、という立場から、この語を用いている。
- [2] 和辻は、人間は「人」という個人の次元と、「間」（あいだ）という共同的・共通的な間柄の次元の、二つの次元をあわせて生きている（「人間」となる）とした。ベルクは和辻のこの考えと、ルロワグーラン(André Leroi-Gourhan)の、人間は社会身体 (*corps social*) をもつという考えに基づき、風土に生きる人間にとって、風土性は人間の半分を意味する、と考えた。人間は動物身体と風物身体の双方をもつ、とも表現される。（オギュスタン・ベルク：「日本風土の教え」、2011 年度国際交流基金賞 日本研究・知的交流部門 受賞記念講演、http://www.jpfr.go.jp/about/award/11/dl/augustin_berque.pdf, (Accessed 1/8/2012))
- [3] 「契機」とは、事物の動的過程において、その変化・発展を規定する本質的・必然的な通過段階、をいう。
- [4] これは近代的風景観をこえた、あらたな現代的風景観の出現を予見させる。今では、人びとの関心は、私たちが住む環境そのものに向けられ始めている。
- [5] ジーバーツは、フェイス・トゥ・フェイスの出会い、現実の知覚的体験、そして直接的関与のための生活空間として認識される「アゴラ」に着目し、生活のための文化的、場所特定の空間を意味する「アゴラ」としての都市空間の再生を主張する。
- [6] ジーバーツの視点は、遺産、記憶、言語、非言語文化、からリージョナル・アイデンティティを見だし、その文化の中で「生きること」の実践を通じて、自己のアイデンティティを見出していく生き方が可能であることを示唆している。
- [7] 吉村は、ソーシャルキャピタルを機能面から類型化し、1) コミュニティ構成員の結束力を高め、組織内での協調行動を促す結束型、2) コミュニティと、行政、NPO、市場などの外部との関係を構築する連携型、3) 同質的な外部のコミュニティの関係を構築する橋渡し型を挙げる。
（吉村輝彦：都市計画とソーシャル・キャピタル、都市計画の理論一系譜と課題、学芸出版社、2006.）
- [8] ベルクが挙げた基準は、1) 場所の美しさを歌う文学。地名表現も含む。2) 観賞用の庭園。3) 眺望を享受するように設えられた建築。4) 環境を表現する絵画。5) 「風景」を言い表す単語もしくは語句。6) 「風景」についての明白な反省、である。
（オギュスタン・ベルク著、木岡伸夫訳：風景という知 - 近代のパラダイムを越えて、世界思想社、2011.）

参考文献

- 1) オギュスタン・ベルク著、中山元訳：風土学序説－文化をふたたび自然に、自然をふたたび文化に、筑摩書房、pp.22, 2002.
- 2) オギュスタン・ベルク：風土性に立った倫理と公共性（基調講演 特集／風土論・環境倫理・公共性）、千葉大学公共研究、第3巻第2号、pp.26, 2006.9.
- 3) Council of Europe : European Landscape Convention, Florence, 2000, <http://conventions.coe.int/Treaty/en/Treaties/Html/176.htm> (Accessed 1/8/2012)
- 4) 芮京祿：欧州ランドスケープ条約の社会的意義とランドスケープの定義、日本都市計画学会 都市計画報告集、No.9, pp.48-51, 2010.
- 5) Council of Europe : Landscape and Sustainable Development -Challenges of the European Landscape Convention-, Council of Europe Publishing, 2006.

- 6) 前掲 1) ベルク：風土学序説，pp.281.
- 7) 木岡伸夫：風景の論理－沈黙から語りへ，世界思想社，2007.
- 8) 樋口忠彦：風景と型；日本の美学 13 型，ぺりかん社，pp.61，1989.
- 9) オギュスタン・ベルク著，篠田勝英訳：風土の日本自然と文化の通態，筑摩書房，1988.
- 10) 和辻哲郎：風土人間学的考察，岩波書店，1963.
- 11) 前掲 7) 木岡：風景の論理－沈黙から語りへ，pp.102.
- 12) 阿部一：日本空間の誕生 コスモロジー・風景・他界観，せりか書房，1995.
- 13) 前掲 7), 11) 木岡：風景の論理－沈黙から語りへ，pp.125.
- 14) ハーバーマス，J.著，細谷貞雄・山田正行訳：公共性の構造転換，未来社，1994.
- 15) Healey, P. : *Collaborative Planning*, Macmillan Press, 1997.
- 16) 高見沢実：都市計画理論とその動向，都市計画の理論－系譜と課題，学芸出版社，2006.
- 17) 小泉秀樹：都市計画理論の歴史的展開と都市計画の公共性，前掲 16) 都市計画の理論－系譜と課題，2006.
- 18) 小泉秀樹：コラボラティブ・プランニング多様な主体による討議と協働による都市計画への転換，都市問題研究，Vol. 59, No. 1, pp. 86-99, 2007.
- 19) 角松生史：「協働的プランニング」の都市計画理論－紹介：Patsy Healey, “Collaborative Planning”，法律時報，80 卷 12 号，pp.86-90，2008.
- 20) 前掲 16) 高見沢：都市計画理論とその動向，pp.29.
- 21) 吉村輝彦：対話と交流の場づくりから始めるまちづくりのあり方に関する一考察，日本福祉大学社会福祉学部 日本福祉大学社会福祉論集，第 123 号，2010.9.
- 22) トマス・ジーバーツ著，蓼原敬ら訳：都市田園計画の展望－「間にある都市」の思想，学芸出版社，pp.97，2006.
- 23) 吉村輝彦：都市計画とソーシャル・キャピタル，前掲 16) 都市計画の理論－系譜と課題，2006.
- 24) オギュスタン・ベルク著，篠田勝英訳：地球と存在の哲学，p.120，1996.
- 25) 西田正憲：自然の風景論 自然をめぐるまなざしと表象，清水弘文堂，2011.
- 26) アランコルバン著，小倉孝誠訳：風景と人間，藤原書店，pp.4，2002.
- 27) 前掲 1) ベルク：風土学序説，pp.289.
- 28) オギュスタン・ベルク：牧神パンの洞窟と日本の住まい；日本の住まいと風土性，日文研叢書，国際日本文化研究センター，pp.157，2007.
- 29) 奥野健男：文学における原風景 原っぱ・洞窟の幻想，集英社，1972.
- 30) 前掲 12) 阿部：日本空間の誕生 コスモロジー・風景・他界観.
- 31) 西村謙司：臨終の住まいの建築論的研究－浄土教建築を通して，京都大学博士論文，2002.
- 32) 野村俊一：日本中世禅宗寺院の景観とその意味：夢窓疎石の修造知識に関する研究，明治大学博士論文，2006.
- 33) 高橋康夫：京都と山並み；高橋康夫他編：図集 日本都市史，pp.294-307，東京大学出版会，1993.
- 34) 上垣外憲一：花と山水の文化誌 東洋的自然観の再発見，筑摩書房，2002.
- 35) 笹川博司：隠遁の憧憬 平安文学論考，和泉書院，2004.
- 36) 前掲 34) 上垣外：花と山水の文化誌 東洋的自然観の再発見
- 37) 本中眞：日本古代の庭園と景観，吉川弘文館，1994.
- 38) 樋口忠彦：景観の構造 ランドスケープとしての日本の空間，技報堂，1975.
- 39) 本中眞：借景 日本の美術 第 372 号，至文堂，1997.
- 40) 齋藤潮：名山へのまなざし，講談社，2006.
- 41) 神山藍：「見え方」と「見方」による山容景観評価方法の考察－京都北山を対象として，土木計画学研究・講演集，Vol.42，招待論文，2010.
- 42) 42)黄永融：風水思想における自然景観の捉え方に関する研究，ランドスケープ研究，Vol. 59, No. 5, pp. 21-24, 1996.
- 43) 唐木順三：日本人の心の歴史 季節美感の変遷を中心に，筑摩書房，1970.
- 44) 西田正好：日本文学の自然観 風土の中の古典，創元社，1972.
- 45) 山口敬太，出村嘉史，川崎雅史，樋口忠彦：嵯峨野の名所再興にみる景観資産の創造と継承に関する研究－祇王寺，落柿舎，厭離庵の再興事例を通して－，土木計画学研究・論文集，Vol.24, pp.307-314, 2007.
- 46) 家永三郎：日本思想史に於ける宗教的自然観の展開，pp.21-22，斎藤書店，1947.
- 47) 日本国語大辞典第二版編集委員会編：日本国語大辞典 13，小学館，2001.
- 48) 内藤湖南：日本風景観 日本文化史研究，講談社，1976.
- 49) 西田正好：花鳥風月のこころ，新潮社，1979.
- 50) 山口敬太，川崎雅史：平安京周辺部の別業における地形的圍繞の空間的特性，土木学会論文集 D, Vol. 64, No. 4, pp. 598-607, 2008.
- 51) 山口敬太，出村嘉史，川崎雅史，樋口忠彦：近世の紀行文にみる嵯峨野における風景の重層性に関する研究，土木学会論文集 D, Vol. 66, No. 1, pp. 14-26, 2010.
- 52) 大室幹雄：月瀬幻影－近代日本風景批評史，中央公論新社，2002.
- 53) 西嶋啓一郎，仲間浩一：朝鮮通信使による風景の記述に見られる風景生成と定着について，ランドスケープ研究，Vol. 63, No. 5, pp. 569-572, 2000.
- 54) 前掲 25) 西田：自然の風景論.
- 55) 小寺駿吉：武蔵野風景観の生長発展，武蔵野，40 卷 3, 4 号，1961.
- 56) 柄谷行人：日本近代文学の起源，講談社，1988.
- 57) 加藤典洋：日本風景論，講談社，2000.
- 58) 川本三郎：荷風と東京-『断腸亭日乗』私註，都市出版，1996.
- 59) 樋口忠彦：郊外の風景－江戸から東京へ，教育出版，2000.
- 60) 山根ますみ，篠原修，堀繁：武蔵野のイメージとその変化要因についての考察，造園雑誌，Vol. 53, No. 5, pp. 215-220, 1990.
- 61) 大室幹雄：志賀重昂『日本風景論』精読，岩村書店，2003.
- 62) 黒田乃生，小野良平：明治末から昭和初期における

- 史蹟名勝天然紀念物保存にみる「風景」の位置づけの変遷, ランドスケープ研究, Vol. 67, No. 5, pp. 597-600, 2004.
- 63) 上村さつき, 黒田乃生, 羽生冬佳: 名勝としての「展望地点」の保護に関する研究, ランドスケープ研究, Vol. 73, No. 5, pp. 679-684, 2010.
- 64) 前掲 25) 西田: 自然の風景観.
- 65) 小野良平: 明治末期以降の山林の変容と「ふるさと」風景観の成立, ランドスケープ研究, Vol. 68, No. 5, pp. 411-416, 2005.
- 66) 前掲 65) 小野: 明治末期以降の山林の変容と「ふるさと」風景観の成立.
- 67) 勝原文夫: 農の美学ー日本風景論序説, 論創社, 1979.
- 68) 矢部恒彦, 北原理雄, 徳山郁芳: 小学校校歌に謳われた全国の地域景観イメージに関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No. 472, pp.111-122, 1995.
- 69) ジョナサン・バーネット: 都市デザインー野望と誤算, 鹿島出版会, 2000.
- 70) Sitte, C.: *City Planning According to Artistic Principles*, Phaidon, (1889 original), 1965.
- 71) Unwin, R.: *Town Planning in Practice; An Introduction to the Art of Designing Cities and Suburbs*, T. Fisher Unwin, 1909.
- 72) ル・コルビュジェ著, 坂倉準三訳: 輝く都市, 鹿島出版会, 1968.
- 73) ゴードン・カレン著, 北原理雄訳: 都市の景観 (原題: *Townscape*, 1961), 鹿島出版会, 1975.
- 74) トーマス・シャープ著, 長素連・長もも子訳: タウンスケープ (原題: *Town and Townscape*, 1968), 鹿島出版会, 1972.
- 75) 都市デザイン研究体: 日本の都市空間, 彰国社, 1968.
- 76) 都市デザイン研究体: 日本の広場, 建築文化, 1971年8月号特集, 彰国社, 2009. (復刻)
- 77) 宮本雅明: 都市空間の近世史研究, 中央公論美術出版, 2005.
- 78) 樋口忠彦, 杉山公彦: 明治期東京の名所の変遷過程についてー名所絵を対象にして, 日本都市計画学会学術研究発表会論文集, No. 17, pp. 511-516, 1982.
- 79) 日高圭一郎, 有馬隆文, 鶴心治, 坂井猛, 萩島哲: 地方における名所とされた神社の立地特性に関する研究ー「大日本名所図録 福岡縣之部」を事例として, 日本建築学会計画系論文集, No. 597, pp. 93-100, 2005.
- 80) 谷本あづみ, 久野紀光, 齋藤潮: 鎌倉の谷戸における別荘立地選定の地形的要因, 都市計画論文集, No. 39, pp. 133-138, 2004.
- 81) 山田圭二郎: 間と景観ー敷地から考える都市デザイン, 技報堂出版, 2008.
- 82) 山口敬太, 中島功, 川崎雅史: 京都の古庭園における地形的圍繞の構成と眺望景観の特性, 土木学会論文誌 D, Vol. 65, No. 3, pp. 317-328, 2009.
- 83) Low, S. M. and Altman, I.: *Place Attachment - Human Behavior and Environment*, Springer, 1992.
- 84) 園田美保: 住区への愛着に関する文献研究, 九州大学心理学研究, Vol. 3, pp. 187-196, 2002.
- 85) 前掲 84) 住区への愛着に関する文献研究
- 86) Taylor, R. B., Gottfredson, S. D. and Brower, S.: Attachment to place :discriminant validity, and impacts of disorder and diversity, *American Journal of Community Psychology*, Vol. 13, pp. 525-542, 1985.
- 87) ケヴィン・リンチ著, 北原理雄訳: 知覚環境の計画 (原題: *Managing the Sense of a Region*, 1976), 鹿島出版会, pp.38, 1979.
- 88) Raymond, C. M., Brownb, G. and Weber, D.: The measurement of place attachment : Personal, community, and environmental connections, *Journal of Environmental Psychology*, Vol. 30, Issue 4, pp. 422-434, 2010.12.
- 89) 高橋美貴: 環境史研究の課題と共生論, 共生社会システム学序説, 青木書店, 2007.
- 90) 佐野静代: 中近世の村落と水辺の環境史ー景観・生業・資源管理, 吉川弘文館, 2008.
- 91) 日本建築学会編, 後藤春彦ほか著: 生活景 身近な景観価値の発見とまちづくり, 学芸出版社, 2009.
- 92) ケヴィン・リンチ著, 北原理雄訳: 知覚環境の計画 (原題: *Managing the Sense of a Region*, 1976), 鹿島出版会, 1979.
- 93) 前掲 22) トマス・ジーバーツ: 都市田園計画の展望ー「間にある都市」の思想, pp.135.

(2012.9.28 受付)

A STUDY ON SUSTAINABLE LANDSCAPE —LANDSCAPE PLANNING AND MANAGEMENT IN LOCAL MILIEU—

Keita YAMAGUCHI

This article aims at developing the practical theory of community-based landscape planning and management in local milieu based on Mesologie expanded by Augustin BERQUE and Nobuo KIOKA. Firstly, I summarized the points of Mesologie as the theoretical foundation, and described the notion of “Sustainable Landscape” in local milieu. Secondly, I enunciated the practical theory of “narrative-based” landscape planning and management on the logical foundation of the epistemological framework of KIOKA to manage discovering and sharing the landscape value. Finally, I dealt with trajectivitet, which represent the mutual relations between representation and construction of the landscape, by means of conducting historical case studies on landscape valuing and constructing, and seeking the possibility of symbolizing the landscape in a tacit living and practice.